

中国の現在地と日本

数年ぶりに北京に出張した。こ徹底ぶりに驚かされる。一つは「キの間、何回も国際会議に招待されていたのだが、私自身の健康上の問題もあり、お断りしてきた。今回、日中関係が新たなフェーズにきているので、中国の現在地を肌で感じたいと思い、北京を訪問し、三極委員会（アジア・北米・欧州）のアジア地域会合に参加した。

中国の変化は速い。共産党一党独裁の統治であり、良い方向か悪い方向かを問わず、党の号令で変化がもたらされる。最初の訪問は1978年であったが、当時の印象は北京の目抜き通りである長安街を自転車で人民服の労働者が黙々とペダルをこいで職場に向かう姿だった。今日、二つの変化の

徹底ぶりに驚かされる。一つは「キの今や高級ホテル以外では現金もクレジットカードもほぼ使えず、スマホに紐付けされたアリペイやウーバーなどの決済詳細を監視できるといふことなのだろうか。二つ目に、自転車に代わり道路を走る車は多いが、青色のナンバープレートのガソリン車を圧倒する薄緑色のナンバープレートの電気自動車が目につく。電気自動車では十分な競争力を持ち、世界を席巻したいというのか。

ウェーブ 時評 wave



田中 均

たなか・ひとし 69年京大法卒。外務省経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官を経て（株）日本総研国際戦略研究所理事長を経て特別顧問、（公財）日本国際交流センターシニア・フェロー。

大きさを語るトーンが強くなりだし、今回会議に出席して、自信に満ちた強弁は愉快ではない。長々とした強弁に驚かされた。中国人の目には、米国は「指導者」と再び追い越すような国力を持ち、その立場をかなぐり捨て、力を強弁で反論するのは現実的ではない。背景に自己利益に走る」と映っている。2001年に私が外務省担当局長であった時、中国は日本の3分の1のGDPしか持たない発展途上国だった。それが25年たった今、日本の4倍以上のGDPを持つ国に成長した。今日の成長率格差を考えると、数年のうちに日本の5倍、6倍となるのではないか。

会議に参加しながら、日本が求められているのは何だろうか。日本が求めているのは何だろうか。日本が極めて厳しい財政事情の中で防衛費を飛躍的に拡大したところ

ろで、それが十分な対中抑止力となるとは考え難い。米国との同盟関係がますます重要になるが、同盟国を守るという米国のコミットメントの信頼性も疑問を持たれ出している。20年続いた中東での戦争の結果、もはや、米国が海外に派兵して戦争をするという敷居は非常に高まった。だとすれば同盟関係の信頼性を高めると同時に、日本を取り囲む地域の安全保障環境を良くする日本なりの外交努力を尽くすということではないか。「台湾有事は日本有事」だとか、「台湾有事は存立危機事態」だといった勢いの良い発言を繰り返すことではなく、東アジアでの信頼醸成措置であるとか、ルールに基づく自由貿易体制の構築、環境・エネルギー協力などを真摯に追及していく事ではないか。中国のアクセスは経済にあり、経済相互依存を壊せない体制を作る事こそ平和の礎となるだろう。